

# ふるさとルネサンスの会会報

(第三号)

歴史を拾う

打田昇二

昭和四十年の半ばに「伝統と現代」という文学雑誌が創刊された。「祭り」「婚姻」「大学」などのテーマで学者、作家、詩人、歴史家の諸先生が昔と今を自由に分析し論じていて、創刊の趣旨は「今は不要な資料でも、いつの日か必ず役に立つ……」ことを目指すというものであった。

しかし、当時の世相は反戦集会・安保反対・大学紛争が盛んで、誰もものんびり昔を思い出さず勇気ではなかったらしく、残念ながら程無く廃刊になってしまった。

同じ頃、司馬遼太郎先生が「歴史と小説」と題する随筆風の作品を出された。徳川家康から新撰組隊士、幕末の志士などに纏わる既成の歴史譚から少し逸れて、より人間的な主人公の本音に迫る裏話のようなものである。その中で歴史上の人物について「完結した人生を見る ある人間が死に、時間が経つ。時間は経てば経つほど(物語の作者は)高い視点から鳥瞰することが出来る。これが歴史小説を書く面白さである」とする趣旨の事を述べておられた。

一口に歴史といっても地球全体から東アジア、日本全土、東国、常陸国、茨城郡、筑波

山麓、石岡市などに分けたらそれぞれに何万年、何千年の過去があり、その地に生きた大勢の人物の生涯が有る訳で、興味があるからと言って全部を覚えることなど所詮は不可能である。結局は自分の好みの範囲で承知したことが自分の歴史観にならざるを得ない。

今は古書の復刻版も出回り、市町村史も出版され、図書館も充実して居て大筋だけなら大概のことが知り得る時代であるが、幕末・明治時代辺りまでは、地元のことさえ年月が過ぎれば完全に忘れ去られていた。

「石岡の地誌」に収録されている江戸時代中期(一七七九)の史料には国分尼寺について「尼僧が居たというのは誤り」というような記録がある。国分尼寺は早い時代に衰退して廃墟になっていたようなので仕方がないこととは思いますが、尼寺の中で真面目にお経を読んでいた尼僧の幽霊は浮かばれない。昔の歴史認識はその程度だったのである。

国分寺跡にしても、注目されたのは大正十一年に国が史跡として指定したからである。日本国中には国分寺が六十何か寺もあつたけれど、その大部分は荒廃し当時の規模も判らなくなっていた中で、常陸国分寺跡は辛うじて礎石の一部が残されていたのである。

一部しか無かつたのは金持ち連中が庭石に持ち去つたりしたようで、そうでなければ大石が自分で動いたり崩れたりする訳がない。

尤もエジプト文明が解明されたのはナポレオン軍が工事用の石の中からロゼッタストーンを見つけたからで、貴重な碑文を刻んだ石はイスラム砦の城壁に使われていた。権力や政治機構が変われば従来の歴史が否定されるのは仕方無いことらしい。

国分尼寺の史料より四十年前程前に書かれた「常府要録」には鎌倉時代初期に書かれた戦記の「前太平記」に常陸大掾平国香の居城を「土浦城」としたのは誤りで、「国香は府中城を築き在城した」と指摘する記事もある。

平氏一族の争いは「将門記」が遍く知られるようになり、また石岡城や府中城の古跡研究で築城の時期が解明されて、今では国香が府中城に居たなどという説は誰も信じないが二百数十年前までは地元の歴史感覚もその程度のものであったのである。

「講師師見てきたような嘘をつき」という川柳もあるが、源義経が衣川の戦いのあと大陸へ渡つてシンギスカンになった。類の説はご遠慮願うとして、平国香の土浦城説などは間違ひとは言つても裏に一つの示唆を含んでいるように思える。

日本の城郭史は、大化元年(六四五)孝徳天皇が大坂城の辺りに難波長柄宮を造営したことを起源としているようであるが、これは城ではなく皇居であることから、次の記録「天

慶四年（九四一）藤原純友征伐のために築かれた宇和島城」が最古となる。

しかし土浦城に「平国香居城説」があればこちらのほうが数年早いので「土浦城は日本最古の城」になる。この場合、国香ではなく「国香」と戦った平将門が奥南進出の拠点にしようとして縄張りをした」のが土浦城であろう。

地元の土浦を差し置いて攻められた石岡で言つても変だが、記事としては誤りのような江戸時代の史料からも何かが推定できるという一例である。司馬遼太郎先生が言われた高い視点から鳥瞰する」とはこつこつこつこつかも知れないと勝手に思っている。

祭礼・芸能・行事など地域の伝統は形があるから細々でも守られる。歴史の探求は伝統の裏に秘められた昔の人々の思いやら人間としての生き様を探り出すことが大切だから一般には敬遠される。しかし、嫌がられても何でもヨミの分別と同じで、数多い歴史の断片を丁寧に区分けする作業が必要なのだと思う。

### 言葉の原点的思考を

白井啓治

「五月晴れ」というのは梅雨の晴れ間のことを言つたんです。」

こんな話しをしたら吃驚されてしまった。五月雨とか五月晴れという言葉が生まれた頃は旧暦でしたから、五月は今の六月、日本の代表的な唱歌「さくらさくら弥生の空は……」

の弥生（三月）は今の暦では四月のこと。今の三月ではまだ「かすみか雲か……」にはなりません。

言葉とその持つ意味は、時代時代に変化していくものですから、五月晴れを梅雨の晴れ間のことである、と目くじらをとて言うことではない。五月晴れは、所謂現在の五月の気持ちの良い天気と認識してもらつてかまわないし、現代のイメージからするとその方がスッキリとしていい。六月の雨は梅雨でいいし、六月の晴れ間は、梅雨の晴れ間でいいと思ふ。

Hすると言えは今ではセックスすることをさすが、もともとは変体の頭文字をとつたものだった。でもHは変体でなくてセックスであつても不都合はないし、それはそれでいいと思ふ。

言葉の意味の時代に合わせたの変化に対しては、概ね賛成できるものであるが、ちよつと待て、と声を荒げないといけないものもある。特に差別用語とされているもの酷さはお話にならないものが殆どである。めくら（盲）はダメで盲（もう）なら良いといふのは「何だこれは？」である。訓読みがダメで音読みが良い（又はその反対もある）など言葉を買洗していると断言せざるを得ない。この言葉の意味そのものには人間性の差別などはないのであつて、その使う人の心がありよつが問題なのである。

物語の創作を生業としている者にとつて言

葉の意味とそれを使つた心のありよつは重大な問題であり、大げさに言えば自分の命そのものである。

生きるということ、暮らすということの葛藤を表現するとき、自分の選択した言葉について、自分自身の心のありよつと同時に、その語源を遡つて考えることがよくある。

言葉というのは、心を口（音）に表すのがその始まりであるが、単語としての言葉のなりたちをみても、現在認識している意味とは別に、人間の生きるということに対する基本思想なり哲学なりを教えられることがよくある。（言葉の発生をもつと遡ると動作とかサインになるが、そこまで遡つてしまつとそこに哲学を考へることが難しくなつてしまふのでここでは一応、音ということにする）

問題解決への基本的な見方として原点的思考の重要性がいわれて久しいが、表現言葉についても、現在の共通認識とは別に、原点に遡つてみつめてみると、認識の軌道修正の方向が見えてくるものであるし、修正はないにしても思考の広がりが出てくるものである。

言葉の原義、思想或いは哲学を無視したある種身勝手な独り歩きは、戦後に氾濫してきた外来語に多く見られる。日本語にはなく、外国語に頼らなければならぬ言葉も、グローバル化した社会には必要なことであり、それを否定する気は全くない。

しかし、言葉の持つ思想・哲学を全く無視しての日本語化というのは困つたことと言つ

よりも人間としての行動そのもののあるべき姿を見誤らせてしまう。

十年ほど前のことであるが、CS（顧客満足）経営に関する本の執筆を頼まれ書いたことがあった。その中にサービスマスの向上という項が出てくるのであるが、このとき直感的にはあったがサービスという言葉に違和感を覚えたのだ。そこでサービスの語源を調べてみようと思書を書くと奴隷（ソウル）が語源であった。サービスというのは奴隷のようにつくすことがその成り立ちであった。

違和感を覚えたのは間違いではなかった。と思ったのである。その後アメリカの経営学の本を調べてみると、経営におけるサービスの基本概念はホスピタリティーであると出ていた。解りやすく日本語に置き換えれば「おもてなし」であるが、この雅た言葉は既に捨てられ、死語になりかけている。

語源から進めて考える究極のサービスとは奴隷のごとくのタダ働きをするということになるのである。これでは経営は成り立たない。たかが言葉、と思ってしまうが、言葉には人間の行動そのものを規制してしまう力の潜在で在ることを認識することが重要である。

タダ働きで思い出したが、最近、あるサークルの集まりに出たときに、ボランティアに関する話があった。来て話している人は、ボランティア協会だか何だかに携わる人らしかったが、あまりに要領の得ない話であったのと、何度も何度もボランティアはタダだと

連発するので、早く話しを止めてもらいたい気持ちもあって、ボランティアというのはタダ働きをすると言ったことではないのですよ、と釘を刺してみたのであった。しかし、その返答があまりにも勉強をしないものであったので、論破する気持ちも失せ、それ以上相手にすることを止めた。

因みにボランティアという言葉の、そもそも第一義の意味とは、志願して兵隊になる。志願兵になる」といったもので、それから発展させ「社会のために私心を捨てて力をつくす」という概念の活動が生まれてきたのである。しかしそこにはボランティアはタダだということ意味は無いのである。の対価がなければやりません、と言わないだけなのである。

それこそ野党の政治家風に言うならば「与党の都合の良い理屈をつけて既成化するな」である。そして、誰かの都合の良い理屈に、本来の言葉の意味を考えないで、外来語を日本語化することによって、日本の、特に地方におけるボランティアにはプロ、もしくは同等のスキルを持った人達の参加が少なく、時間をもてあました人達のステータス化した遊びになってしまっているといえる。

言葉には強い力が内在されており、使い方や使う人の心のありようによって、とんでもない方向に進まされてしまうものである。ふるさとルネサンスを志向するに当たっても、発見した瀕死の文化に対して原点に遡って見直すことの出発点として、言葉の原点的

思考が大切であり、そこにふるさとをルネサンスするヒントが隠されて在るのではないかとと思う。

## 劇団「表現舎しゅわーど」研究生募集中

「表現舎しゅわーど」は、ふるさとに生まれた物語を「語り朗読にサインを基軸とした舞による朗読舞」と「語り朗読とサイン演技を一体化した朗読舞劇」を中心とした舞台表現活動を行なっているふるさとルネサンス劇団です。

表現舎しゅわーど・俳優塾では、研究生を募集しております。俳優にとって不可欠な演技表現の基本について、週一回のマン・ツー・マン授業で半年間学んでいただきます。詳しくは、下記までお問い合わせください。

カフェ・キーボー・ふるさとルネサンス（成田清和）  
電話0299-23-1100

外は雨です。

雨も、雪も、人間をどこか違う世界へ誘つたものです。

車の音が変わります。時折アクセントに雨だれが聞こえます。

家の周りが芝生や木々に囲まれていると音は包まれてしまい、雨や雪の時にはその静けさにふっと窓外に目をやってはじめて「あゝ雨だったんだ」とか「雪!」とか。

過日、友人と水車を利用した昔ながらの方法で杉の葉を粉にして杉線香を作るお宅へ行ってきました。

昔は、用途は違つてもその小川に沿つて何軒も水車があつたのだそうですが、今は駒村香堂さん一軒です。何よりも、大量生産による安さと効率が求められるようになり、線香も海外から人工的な香りをつけた安いものがどんどん押し寄せてきています。

そのこの風土に育つた自然の恵みを大事に少しずつ使わせてもらい、戴いたものはまた自然にお返ししておくということがなくなつたのは人間の大きな大きな過ちですよ。

香堂さんの奥さんがこんなことを話してくださいました。

「川の上流に水車のある家ではいつでも下で営む人のことを考えて水を使つんですよ。そつうい気遣いが生活のどの場面でもありました。だから 大雨の後には みんなで川を

きれいにしたものです。昔は 枯葉や小枝など自然のものが川につまっていたましたが、今はその水を利用する人がいないから誰も注意を払わなくなつて人工的な匂いがたくさん流れてくるようになりました」と。

遠くの方へ視線を移しながら杉線香のことに触れて

「昔は建築のために必要な分だけ杉を切り出し、枝葉(えだは)は線香屋が買い、線香を作つたあとの灰は灰屋が買いました。それでも残つた灰は自宅で磨き粉にしたり畑にまいたんです。ほんとに捨てるどころなんて何もないんですよ。余つた杉の枝はたぎぎにするのですが、その杉の枝を束ねるのには昔ながらの縄が一番です。よく締まるし使い勝手がとてもしいんです。縄をこうして同じ長さに揃えて、途中にこぶを作つておくと具合がよいし何度でも使えます。でもだんだんその縄さえも手に入りにくくなつたんですよ。稲作の方法が機械化されてきたのと、縄の需要が少なくなつたからなんでしょうね。」

お家の庭に、昨夜の満月に咲いたと思われる月下美人が一輪うなだれていました。今はその芳醇な香りもありませんが一夜限りの花も月を待つていたんですね。

みことな「生」だと感じました。  
月下美人もいにしえ人も。

いつか朗読舞の脚本に万葉集を取りあげてやるうと思つていたのだったが、意外に早い時期に挑戦することになった。

表現舎しゅわーどの俳優、小林幸枝さんの舞表現力の長足な進歩が挑戦を早めたのであるが、脚本を書き始めた途端 大変さを思い知らされた。

朗読舞は、サイン(手話)を基軸とした舞に表現するものですから、古語をそのままサイン化するわけにはいかない。舞表現しやすいうように現代語訳を与えるのであるが、当然現代語訳は長くなる。それを更にサイン舞として俳優さんが創造・構築していくわけだから、歌の朗読をどのように当てていくかが大問題なのである。

万葉集巻第十四の東歌より常陸の国の歌を抜書きしてみたものの、はたと行き詰つてしまった。しかし、脚本とはそれが完成品というわけではないので、どう処理するかは演出家と俳優さんにまかせ、とにかく抜き書いた歌に現代訳を与え書いたのであった。

万葉集の大半(七十%)は恋の歌である。しかし、歌に紡がれた恋のドラマは直截的である。そのためか万葉集といえは、益荒男(ますらを)「ぶり」と、古今集の「手弱女(たおやめ)「ぶり」に对立させて言われており、それが定説化されている。

万葉集と古今集とどちらが好きかは、それ

それであるが個人的には古今集のほうが好きであるし、舞技的には古今集のほうが演じ手の幅を広げられるといえる。そして、これも個人的にはあるが古今集の方が文芸としての表現の深さが感じられて好きである。

演技として万葉集と古今集を比べると、これも個人的にはあるが、万葉集は感情的動作表現であり古今集は心象的動作表現であると思う。

不思議なことであるが、「万葉集を舞台にしてみようと思う」というと十人中十人の人が「それは良いですね」という返事をもらえらる。ところが、「今度古今集を舞台にしてみようと思うっているんですよ」といつと、「ああ、そうですか」とつれない返事が返ってくる。特に女性の方の反応はつれない。これはもしかしたら「益荒男ぶり」に関係しているのかもしれない。

しかし、このまま黙って引き下がってしまったら万葉集の定説化されている、「益荒男ぶり」に軍配が上がります。次に古今集恋詩を舞の台本に取り上げるに支障がきたすと困るので、へそ曲がりを見舞って、古今集の「手弱女ぶり」に少し異を唱えてみたいと思う。

そもそも万葉集の益荒男ぶりと勘違いされる一因は、万葉集を詠んだ時代には、まだ文芸としての用語の未成熟であったことから、俗語日常語が多く用いられていることがあげられる。そのため直情的、激情的な表現形式をとらざるを得ないという側面があったとい

える。

古今集が手弱女ぶりに思われるのは、心情と言葉の調和にあるといえる。それが安定感をもたらずものだから、軟弱に勘違いされたのではないかと思われる。しかし、語法的な視点でみると、古今集の方が硬派であり益荒男ぶりである、といえる。

大好きな沖繩に住みたい 小林幸枝

二十歳くらいの頃から沖繩に住みたいと思い始めた。冬がなく青い空と青い海と色鮮やかな魚がいっぱいの中のにんびり暮らせたら最高だろうな、と思ったのだ。

一時期、沖繩へ行っちゃおう、と決断しはじめたのですが、叶わなかった。一番のネックだったのは、髷の私に働く場所がないことだった。

私自身は、声で話せないことにはそれほど不便を感じていないし、髷であることで「ミニニケーションがとりにくい」とは思っていないのですが、矢張りそのことの理解が小さいことは残念に思う。こつした理解不足は沖繩に限ったことではなく、この石岡や茨城県にも同じようにある。

沖繩には七回出かけているが、いつ行ってもその美しい空と海は、変わりなく迎えてくれる。そして、島の人達も、

自然は嘘をつかない。

私に姑息な嘘がなければ、いつも同じ笑顔で迎えてくれる。悲劇喜劇も沖繩の青はみんな包み込んでくれるように思える。

沖繩の歴史も文化も好き。真夏の炎天下に死ぬほど暑いビーチバレーもやりたい。

「沖繩の炎天下にそんなことしたら本当に死んじゃうぞ！」

本当にそうなんです。でも、熱中症の心臓発作で命が止まってしまっても許せるくらい沖繩の自然が好きなんです。

ああ、こんなこと書いていたらあの素敵な風景の石垣島・八重山諸島・与那国島に行きたくなくなってしまった。早速計画しよう。そして島人の三線にのって沖繩恋詩のサイン舞を舞ってこよう。

沖繩に住みたいという思いは、ますます大きなものとなっていくのだけれど、私は欲張り。大好きな犬とも一緒に暮らしたい。何十匹もの犬達と一緒に一日野山を駆け回ってみたい。いろいろな犬達と一緒に暮らすのであれば、沖繩は無理。

私一人の常世の国は沖繩だけど、犬達と一緒に常世の国はと考えると、この常世の国は理想郷。穏やかな四季がある。広い犬牧場の真ん中に盛り土の野外劇場を作り、月に向かって犬達と一緒に夢を舞つのもいいな。

小学校の皆さんこんにちは。常陸風土記の丘へお出で頂きありがとうございます。ご案内させていただきます兼平です。どうぞよろしくお願いいたします。

石岡は茨城のほぼ中央に位置し、西に筑波山、東に霞ヶ浦を望む風光明媚、そして気候も温暖で一万年以上も前から人々のせい喝の場として開かれていました。

旧石器時代、縄文、弥生、古墳、飛鳥、奈良、平安時代、今皆さんはこの時代を学んでいますか？

飛鳥時代（六四六）に現在の茨城県ほとんどが常陸の国として誕生し、ここ石岡は国府が置かれ、今の県庁ですね。政治経済の中心で大いに繁栄しました。そのために沢山の遺跡、価値あるものが発見され、ここ風土記の丘の地には宮平遺跡として、縄文時代のものが数多く発掘されました。そうした価値あるものの一部が、この中に展示され、学習の場として、人々の憩いの場として平成二年にオープンしました。

そのとき皆さんは生まれていませんね。大昔、もしかしたら皆さんのご先祖様がこの地に住んでいたかもしれませんね。

江戸時代後期（二百〜二百二十歳くらい）の長屋門、同じ年代の曲屋、現代と古代の架け橋である金亀橋、現代・中世・古代の門をくぐり古代人になって、帰りもくぐって現代

## 劇団・表現舎しゅわーど7月アトリエ公演

7月23日（日曜日）

表現舎しゅわーど七月アトリエ公演は、万葉集「ひたち恋詩」の朗読舞を中心に、朗読「鈴の宮のおたふくちゃん」朗読舞劇「潮の道余話」をお届けします。

万葉集「常陸の国の歌」を小林幸枝が新しい解釈の元にサイン舞を創作し挑戦します。万葉集をサイン舞技に表現するのは、舞台史上初めてのことです。関東の名山「筑波山」を背景にしたおらかな万葉の愛の歌を比類ないスケール感を持って小林幸枝が舞います。

演	出	白井啓治	出	演	小林幸枝
篠笛演奏		李 英哲			山 重幸
舞台背景画		兼平智恵子			しらみひろぢ

一回目午後2時開演 二回目午後5時開演

前売券1300円 ペア前売券2400円

詳しくは下記にお問い合わせください

〒315 0014 石岡市国府3丁目4-21

カフェ・キーボー ふるさとルネサンス

電話 0299-23-1100

人になって帰ってくださいね。

年齢二百〜二千年の南会津の古民家、日本一大きい石岡祭りのシンボル獅子頭、展示室には縄文から平安の発掘品、そして復元された古代の家屋を巡っていきましょう。

最後に私からのお願いです。古代の人が居て今の私達の暮らしがあります。私たちの先

祖を知る、歴史を勉強するということは、自分達の未来を作るといふことです。歴史を好きになるといふことは自分の将来、未来に希望を持つといふことです。だから皆さん歴史の勉強を好きになってくださいね。

こんな拙い歴史ボランティアガイドですが、

子供たちから礼状を頂く。

・ボランティアでぼく達の勉強を手伝って頂きありがとうございます

・この体験を忘れずになにかに生かせたら  
ここで覚えたことを全て歴史の勉強につなげたい

・展示室の土器はすこかった。大人になって  
もずっと覚えていたい

・昔のことがわかるといいうことはとても楽しいですね

・兼平さんに会い、歴史について知ったことも、私にとっては私の歴史として心に残る  
と思います

未来ある子供達からの礼状を頂く、お金では得ることの出来ない喜びを感じます。

県内外からの来所も多くなり、市内の皆さんも一様に石岡にこんな歴史があったなんてと言われ、時には宣伝不足ですとお叱りを受けることもあります。

歴史に興味の有る無しにかかわらず、京都人のように歴史に誇りを持ち、自分の住む町を愛し、先人の思いを後世に繋げることに一助になればと励んでいます。

北根本にある船塚山古墳に対話する常世の国の風景、風土記の丘での古代人との対話は生活の潤いになると思います。

『子らの声桜花の散らす風土記の丘』

つゆの丘

山 重幸

私の一日は、朝四時ころからはじまる。つゆとはいえ雨が降りません。地球温暖化の影響が。

以前は、一般に六月半ばから七月半ばの約一ヶ月が平年のつゆでした。最近北極海の氷がとけたり、シベリヤのツンドラがとけて湖ができています。そのため冷たい水が北洋に流れ込んで、海面は冷やされ、強いオホーツク海高気圧が発生しやすくなっている。

その高気圧は早く、長く存在して南下を始める。これでは従来の気象常識が通用しない。過去のデータが役立たない。予報がたてにくい。予報官は、確報を出せず気の毒である。

私は、永年天気図とにらめっこしながら世界の海を航行し、台風、ハリケーン、サイクロンと闘い、しかも気温(+40度Cから)20度Cの気温の変化の中を空調なしの生活をしてきました。おかげでいつの間にか自然の変化への対応が出来るようになり、少々のことなら我慢ができるようになった。

今は、老齢の知恵者のタマとシベリアンハスキー系の辛抱強いタロウに慌てなさんなど諭されながら、一日を過ごしている。

彼等は空梅雨の突然の暑にも慌てることなく、木陰を利用し、風通しの良い場所を探し、のんびり日中をやり過ごし、夕方可愛い声で「ただいま」と元気な顔で帰ってくる。

風がさざやいていった 伊東弓子

外は暑い。風の通る廊下で本を広げて寝そべっていた。

私の前を過ぎていく影を見た。

「誰かな」

声をかけてみようかなと思っただ次の瞬間、

「じいちゃん。ゆみこのじいちゃん！」

と呼んでいた。おじいさんが亡くなって二

年後位に私は生まれたのだから、姿形、顔も知らないはずなのに。

「はいよ」

「ねえ、どこへ行くの？」

「寺の普請のために一寸ご無理を申し上げてくるからな」

「つれてって」

「遠いところだからだめだよ」

「いやだよ、待っててじいちゃん」

何度も呼んだが振り向かないで行ってしまった。

泣いているわたし。

汗を袖でぬぐって寝返りをしていた。

間もなく夜明けなのだろうか、粗末な黄衣

まとった父の声がした。

「けんぼつ、大丈夫か？」

「つた」

「やつちゃんは疲れたか？」

「つた」

「つた」

「つた」

「よしよし。… 『子は強いな』」

「うん」

石段を登りながら、

「この山にはな、金の鳥が眠っているんだぞ。知ってたか」

「ふえーッ」

「どっしよつもなく困ったときは、この山を掘って金の鳥に助けをもらおうだからな」

「いつ掘るの？」

「ちつとやそつと困ったぐらいでは掘らないけどな」

「うーんと困った時かい？」

山は古墳だった。ちよつと登りきったとき、杉の枝々の間から差し込んできたまぶしい光の中に溶け込んでしまった。仏様になっちゃったのかな、と思った。

陽がまわつれ顔に差し込んできて、まぶしいので無意識に部屋の薄暗い方に転がって行った。

「まもなくおはあちゃんと母の声がした。」

「ますこさん、もう疲れちゃったよ。」

「どっしました」

「毎日使つ水を竹藪を下つて畑のところにある井戸まで行って、そこから汲んで運ぶんだよ」

「そつでしたね」

「暑い日も、寒い日も、雨の日だって風の日だってね」

「食べ物、飲み物作りには欠かせないですからね」

「それと、貰い湯も怖くてね。この塚と明神様の参道は大きな森の中の細い道で、遠くに小さなお灯明が見えるだけで、枝や葉が動いたり、唸るような声がしたり、お風呂でさっぱりしたかどつかなんて気持ちもどこかへいつてしまつてね」

「本当にご苦労様でしたね。もつゆつくりしましよつね」

姑と嫁は西の方にある開山上人、中興上人の衣塚の方へと去っていく。二人は三十歳くらいの歳の差があるはずなのに、二人とも小さく丸くなつて姑は杖をつき、嫁は手押し車に縋つて消えていった。

桜が咲く春、紅葉する秋。

このときの流れを何度繰り返してきたのだろう。今は夏。衣塚の木々の緑も濃さを増している。

快い風に吹かれて目を覚ました。庭の木立の緑が目に入り、一眠りしていたのだと気付く。わたしの体と同じようにページを折り曲げて一冊の本が横たわっていた。

それは江戸時代の南群地区の絵地図で、当時の上玉里村のページが開いてあった。寺と明神様にかけては大きな森が続いている。今は、子供の声や役所への人の出入りする声、車の音の賑わう様が変わっている。

横になつていたのは何分でもなかったのに、長い時間の流れを凝縮して大切な人の声を運んでくれた風がありがとつと眩いてみた。

### 今月のふるさとルネサンスの行事

ふるさとルネサンス展

七月十日(月)～七月二十一日まで、水戸のNHK「ワイワイギャラリー」で「ふるさとルネサンスの会の作品展」が開かれます。期間中、小林幸枝の朗読舞も披露されます。お時間のある方ぜひご覧下さい。

絵と一行文教室

七月七日(金)午後一時半～三時

七月二日(金)午後一時半～三時

朗読サイン舞教室

七月四日(金)午後七時～八時半

七月八日(金)午後七時～八時半

劇団「表現舎しゅわど」アトリ公演

七月二十三日(日)

午後一時&午後五時開演

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)